週報
こひつじ
第40巻　17号
大津キリスト教会
菊池郡大津町室 119
TEL 096-293-4470
FAX 096-293-4961
牧師　米村　英二

向きを変えて、出発せよ

その四　最後の出発

あれから五〇年以上になる。当時の中高生たちの多くがすでに還暦を迎えつつある。

そして今、私は最後の出発に向かおうとしている。それは死に向かっての出発である。

でもこれは、若い人にとっても必要な出発なのではないか。人はみな死と正しく向き合うまでは、ほんとうの意味で人生を生きているとは言えないだろうから。

そしてその出発は、自分に与えられた時間がどれくらいかと考えることから始まる。

少し前まで人生は五〇年と言われていた。

夏目漱石は四九歳、正岡子規は三四歳、石川啄木は二六歳、樋口一葉は二四歳でそれぞれ亡くなっている。明治期の、これらの文学者たちが、自分に与えられた短い時間のなかで、りっぱに人生の意味をつくり出していたことに私は驚くのである。

今では多くの人が彼らよりずっと長い人生を与えられている。

それでもやはり終わりは来る。

「私たちの齢は七十年。健やかであっても八十年。・・・それは早く過ぎ去り、私たちも飛び去るのです」（詩篇 九〇の一〇）

と言った詩篇の記者は、そのあと、こう祈った。

「それゆえ、私たちに自分の日を正しく数えることを教えてください。そうして私たちに知恵の心を得させてください」（同一二）

自分の時間が限られていることを知る。それが死への出発の第一歩である。

死への準備教育を日本で最初に唱えた元上智大学教授のデーケンさんは、自分のゼミで学生たちに必ず次の質問をした。

「もしあと半年の命しかなかったら、残された時間をあなたはどのように過ごしますか」

そのとき多くの学生たちは自分の生活の変更を迫られたという。

彼らは、ほんとうにやるべきことではなく、どうでもよいことのために時間の大半を費やしてきたことを知って愕然したのだ。

しかし、それが意味ある人生への彼らの出発点だったのである。

死に向かって出発するにあたり、次に考えるべきは死の意味についてである。

死は、決してすべてを失うことではない。

人に影響を与えるのは言葉や思想、事業であると私たちは通常考える。が、イエスの場合、彼の死こそは、人類に影響を与えた最大のものだった。

人びとは、彼の死を見て感動した。魂が揺り動かされた。百人隊長は、神をほめたたえて言った。

「この方はまことに神の子であった」（マルコ一五の三九）

イエスとともに処刑された強盗のひとりは、死に臨むイエスを見て回心した。

イエスだけでなく、どんな人の死も何かを残すのではないだろうか。

たとえば、東北の大震災でマイクを離さず、自分の危険を顧みず、避難を叫び続け、津波にのまれて死んでいったひとりの女性のことが報道され、多くの人が心を動かされた。

彼女の声で助かった人たちは、彼女のことをおそらく生涯忘れないだろう。

また、彼女の犠牲を思い出すたびに、自分の人生をいい加減に生きてはいけないと思うに違いない。

ひとりの女性の死、その贖罪的死は、多くの人をまじめな人生へと向かわせたのである。

最後に、死に向かう出発を勇気あるものにするのは、死後の世界に対する希望である。

私の友人に松岡さんという人がいる。彼の妻栄美子さんは、私たちとともに伝道した人だったが、がんをわずらい、五四歳で亡くなった。

松岡さんは、その後、退職すると、彼の技術と得意の英語力を使ってジャイカの職員となり、ブータンに派遣された。ブータンは仏教国だが、そこに小さな教会があった。彼はその教会を経済的に支援した。オルガンが必要だとわかると、すぐにそれを日本から取り寄せた。また、その教会に、自分の妻によく似て、賢く、信仰熱心な小学生の女の子がいるのを見て、彼女を自分の養子にし、りっぱに大学までめんどうをみてやった。

その後も、セイロンやパキスタン、ヨルダンへと精力的に出かけ、それらの発展途上国のために労力を惜しまなかった。

「どうしてそこまでやるの？」

と私が聞くと、彼は答えた。

「天国へ行って、妻に会うとき、彼女に恥ずかしくない人生を送りたいからだよ。退職後、何の社会貢献もせずに、ただのんびりと老後を送っていたら、『私よりずっと長い命を与えられながら、いったいあなたは何をしてきたの』と彼女が悲しい顔をするような気がしてね」と。

彼にとって、死は天国へと直結していた。

このように人生の最終のゴールとは、天国でイエスの前に出るときであり、先にイエスのもとに行った、われわれの愛する者たちとの再会のときなのではないか。

そのとき、彼らに恥ずかしくない人生を生きて来たとわれわれは胸を張って言えるだろうか。（終）

今日の礼拝

○第一礼拝は午前一〇時から、第二礼拝は午前一一時から。

○教会学校は午前一〇時から。

○説教は米村牧師。

先週の礼拝

司会は岩崎宏志さん、奏楽は屋宜浩子さん。説教は第一サムエル記一八章から、ヨナタンの感動について語りました。

先週の出席

第一礼拝が四三名、第二が四八名、合計九一名（男二九、女六二）。それに子どもが四名、合わせて九五名でした。

黄綬褒章

セブンフーズを経営している前田佳良子さんが黄綬褒章を受けられました。おめでとうございます。女性の働き方改革が高く評価されたためだとのことです。教会としてもうれしいことです。今後も社会に貢献されるように祈りました。

ＫＢＩを訪ねて

四月一七日から三日間、関西聖書学院（ＫＢＩ）で奉仕しましたが、学院は生駒山の中腹にあり、もと保養所の建物だったそうですから、そこからの景観がすばらしかったです。

午前中は講義ですが、午後は自由です。生駒山に登ってみようと思い、登り口を探しましたが、見つかりません。そこでケーブルカーで山頂へゆくと、そこは遊園地になっていました。せっかくですので、飛行塔という乗り物に乗り、三〇メートルの高さからの眺めを楽しみました。帰りは下山道路を見つけ、徒歩で下りました。四〇分ほどかかったでしょうか。

授業のほうは、在校生が三五名。そのほか聴講生も多くいたので、六、七〇名の参加者だったかと思います。緊張しましたが、学生たちの反応は悪くなかったように思います。結構、笑ってくれましたので。

ぼくの書いた本を四〇冊ほど送っていましたが、すぐに売れてしまい、さらに一一〇冊ほどの注文がありました。関心をもっていただけたのは、うれしかったです。